



「津波ごっこ」は東日本大震災を経験した子どもに見られた遊びの一つ。被災地の保育士によれば「津波が来た！」とある子どもが叫び、みんなで一斉に避難する」というものだ▼

「『遊び』は、子どもにとって最も自然な表現言語」とユニセフ協会の本田涼子・心理社会的ケアアドバイザーは説明する。「例えば、ナチス・ドイツのアウシュビッツには子どもたちが石とか棒で作った人形が残されている。子どもは遊びを通して、楽しい気持ちだけでなく、辛い気持ちや困っている気持ちを表現する」▼東日本大震災子ども支援ネットワークは5月末に「遊びと親子の居場所」をテーマに意見交換会を開いた。登壇者の本田さんによると、子どもが遊びで感じる刺激は、脳の発達に大きく影響するという。よく遊んだ子どもは、勉強ができるという調査結果もある。さらに遊びには癒やしの効果もある▼冒頭の「津波ごっこ」は、例えば、初めは人々が流されてしまう結末でも、車が現れてみんなを乗せて逃げてくれる、などと徐々に変わっていく。大人の場合は怖いことがあるれば、誰かに話すことで心の整理を付けていく。子どもは体験を遊びで表現しながら、繰り返しすることで恐怖をコントロールできるようにする。子どもの遊びの意味と遊べる環境の大切さを見直したい。

(千葉才子)